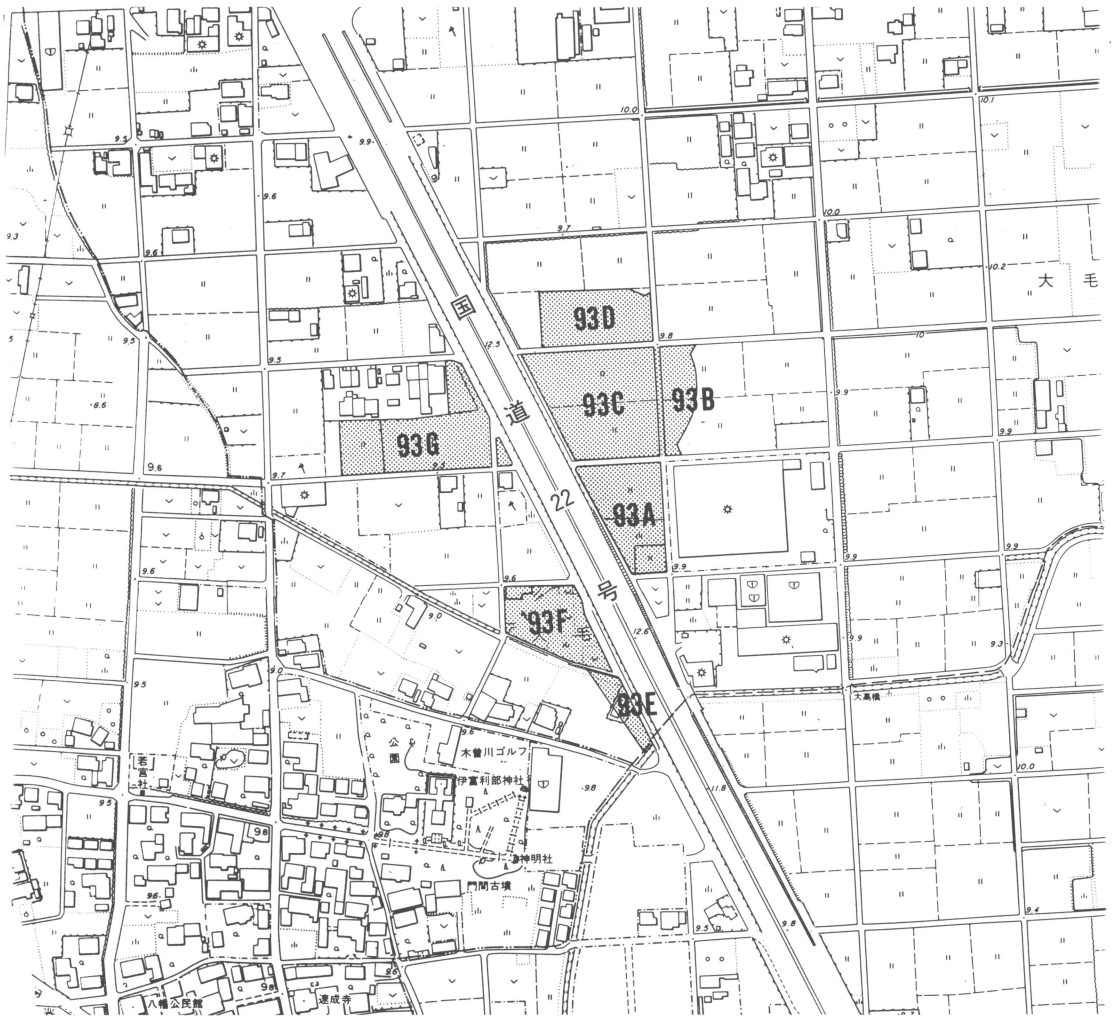
大 毛 沖 遺 跡

調査の経過　大毛沖遺跡は、広大な濃尾平野のほぼ中央部に位置する一宮市北西部から葉栗郡木曽川町にかけて所在し、木曽川によって形成された標高９ｍ前後の自然堤防上に広がりが認められる遺跡である。遺跡の周辺には、縄文晩期のタイプ・サイトとして著名な馬見塚遺跡、古墳時代後期に築造された浅井古墳群や尾張でもめずらしい集石遺構が確認された大塚遺跡、古代製鉄遺構が確認された清郷遺跡など数多くの遺跡が分布している。

発掘調査は、愛知県一宮市と富山県小矢部市をむすぶ東海北陸自動車道の建設に伴うものであり、日本道路公団より愛知県教育委員会を通した委託事業として、平成５年４月より17102㎡をＡ～Ｇの７調査区に分割して調査を実施した。調査の結果、大きく古代（Ⅰ期）、平安時代末から鎌倉時代（Ⅱ期）と室町時代（Ⅲ期）の３時期に区分される遺跡であり、



第Ⅰ図　調査区位置図（Ⅰ：5000）

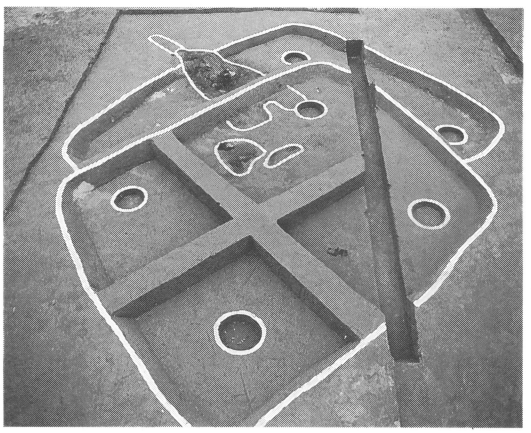
さらにⅠ期については、古墳時代終末から奈良時代（Ⅰａ期）および奈良時代末から平安時代（Ⅰｂ期）に細分できることが明らかとなった。

調査の概要　遺跡の基本層序は、調査区により若干異なりをみせるが、概ね上位より１層：耕作土、２層：淡灰褐色シルト層、３層：灰色砂質シルト、４層：灰色シルト層の順に堆積し、基盤面と考えられる５層：灰褐色砂層に至る。Ⅱ期およびⅠｂ期の遺構は２層上位で、Ⅰａ期の遺構は３層上位で検出した。

Ａ・Ｃ・Ｇ区では、Ⅱ期の遺構を中心に検出でき、Ｃ区北西端からＧ区南東端に分布する墓域とその両側の微高地上に展開する居住域が明らかとなり、尾張北西部における中世集落の様相を把握する良好な情報を得ることができた。また、下層の調査では奈良時代の竪穴住居を中心とした遺構群を確認している。Ｅ・Ｆ区は、遺跡の南端に位置し、希薄ながらもⅡ期およびⅢ期に属する溝・土坑・集石墓などを検出した。　（服部信博）

Ａ・Ｃ区の遺構（Ⅰ期）　Ⅰ期の遺構としては、Ａ区北端を頂点に南に向けて徐々に下降する灰色砂質シルト層上において、住居跡９棟、大溝３条、溝26条、井戸１基及び土坑１基を確認し、さらに自然流路２条を検出した。

住居跡については、ＳＢ01・ＳＢ06・ＳＢ07の３棟と、ＳＢ08・ＳＢ09の２棟が、それぞれ重複して検出された。ＳＢ01・ＳＢ06・ＳＢ07は調査区北西角で検出されたため、規模は不明瞭である。ＳＢ01は奥行80㎝、幅90㎝の、北側に開口部をもつカマドを有しており、カマド内から出土した土師質甕の口縁部より、Ⅰｂ期の竪穴住居と考えられる。ＳＢ06においても床面に炭化物が帯状に広がり、土師質甕を中心とした遺物が出土した。ＳＢ07からは灰釉陶器の段皿、土師質甕及び灰釉陶器をかぶせた状態で角柱状の石が出土した。



Ａ区　ＳＢ08、ＳＢ09完掘状況

Ａ区　ＳＢ07角柱状の石出土状況

３棟の年代は、その切りあい関係からＳＢ01が最も古く、次いでＳＢ06、さらにその後にＳＢ07が位置づけられ、少なくとも２度の造り替えが行われたことを想定できる。また井戸（ＳＫ06）からも灰釉陶器が多数出土しており、竪穴住居と同様にＩｂ期の遺構と思われる。ＳＢ08・ＳＢ09はともに約５ｍ×約４ｍの規模をもち、柱穴も確認できた。ＳＢ09からは奥行2.3m、幅１ｍのカマドを検出し、遺物も焼土近辺から集中して出土した。ＳＢ08からは須恵器の杯蓋が出土しており、これらの竪穴住居はその出土遺物からＩａ期のものと考えられる。

調査区の西寄りに住居跡が展開したのに対し、東寄りの位置では「大溝」と多数の「並行する溝」が検出された。「大溝」についてはＳＤ01が北東～南西を結ぶ方向で、ＳＤ02が北西～南東を結ぶ方向で延び、直交している。両者ともに幅約１ｍ、深さ約30cmのものである。さらにＳＤ03はＳＤ01と同方向に延び、幅・深さともにほぼ同様である。「並行する溝」はいずれも幅約50cm、深さ５cm前後～20cm前後で、「大溝」に区画されるかのようにＳＤ02と同方向に、整然とまさに畝状に配置されていることから、この区域をＩａ期の畑地と推定することも可能である。

調査区南寄りの区域では、自然流路がやはり北西～南東を結ぶ方向で２条検出された。大溝との切りあい関係を考慮すると、古墳時代以前の流路であったと思われる。

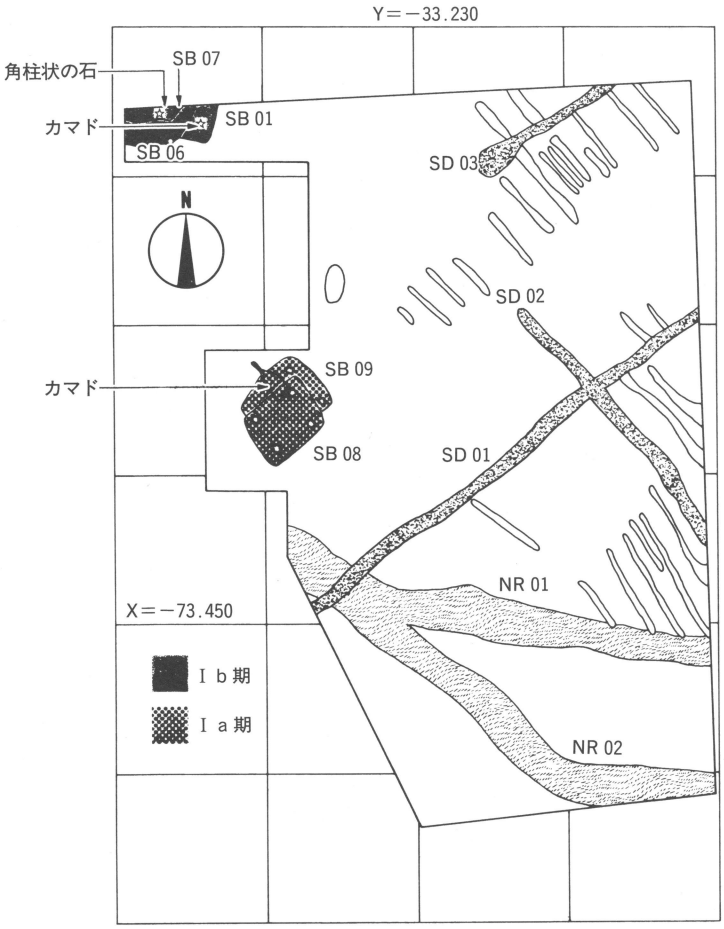
なお、Ａ区の北に隣接するＣ区において検出したＳＸ01・ＳＫ09についても、灰釉陶器及び土師質甕を出土しているので、これもＩ期の遺構として加えておきたい。

以上のことから、Ａ区及びその周辺の調査区では、居住域・生産域及び自然流路という生活環境を構成する諸要素が確認されたが、古代における集落景観の全体像を構築するためには、さらに今後の調査の成果が期待されるところである。　　（小池一徳）

（II期）　II期の遺構は、Ｃ区の中央を流れるＩ期末に埋没した自然流路を挟んで、北西から南東にかけて広がる微高地部分の第２層（淡灰褐色シルト層）上に展開する。検出した遺構は、溝76条、井戸８基、土坑68基、大型土坑１基、大型竪穴状遺構４基、ピット53基を数える。

Ａ区では、調査区の中央部でコ字状に折れ曲がる溝ＳＤ14・17を検出した。この溝の西側からは、南北方向に並行する十数条の溝が確認された。これらの溝はいずれも幅約30cm～40cm・深さ７cm前後で、畝状に並ぶものであった。また、この溝に伴って昆虫塊を７ヶ所で確認した。コ字状の溝の北側からは、大型土坑ＳＸ01や井戸ＳＫ04・53を検出した。ＳＸ01は、約７ｍ×８ｍ・深さ1.1 ｍの不定形な擂鉢状の遺構で、煤の付着した灰釉系陶器や割れた河原石が多数出土した。ＳＫ04の基底部からは、井筒として転用された常滑の甕（13世紀）が完形品で出土した。この甕の上部には、口縁部に接して曲物が一段残っていた。また、畝状の溝の北側に位置する井戸ＳＫ10の基底部からも、曲物が良好な状態で出土した。遺物から見て、ＳＫ04と同時期のものと思われる。

以上のことから、Ａ区ではコ字状の溝の西側に畑地、北側に大型土坑や井戸を配した中世の生活環境が浮かび上がってくる。そうであるならば、この溝は何らかの意味をもった



第２図　Ａ区Ｉ期主要遺構配置図（Ｉ：500）

Ａ区　ＳＫ04（井戸）常滑甕出土状況

Ａ区　完掘状況

区画溝であった可能性が高い。区画溝の内側には遺構が少なく、その性格を特定するには今後の調査の成果を待たねばならないが、Ⅰ期の遺構の調査結果を踏まえ、あえて推定するならば居住域が考えられるであろう。

C区では、自然流路の南側で井戸を5基確認した。このうちＳＥ03は、上部径約１ｍ・下部径約20cm・深さ約1.2ｍで、約25cmの河原石からなる逆四角錘状の石組遺構を有しており、出土する遺物から13世紀頃のものと思われる。これに隣接するＳＫ06は、基底部に曲物を有する井戸で、遺構内から煤の付着した灰釉系陶器の他、墨書土器や漆器椀・箸・刃渡り23cm・幅2.5 cmの小刀・板状木製品等が出土した。これらの遺物から見て、ＳＫ06もＳＥ03と同時期と思われる。

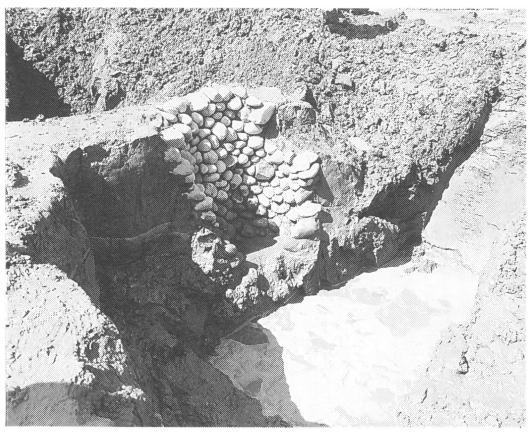
またC区の南西部では、平均長軸約12ｍ・短軸約８ｍ・深さ80cmの大型の竪穴状遺構（ＳＸ02～05）を４基検出した。これらの遺構は、Ｌ字状の溝ＳＤ08やＳＤ05・06及び01～04で囲まれた区域に２基が一単位の形で並んでおり、おそらくは倉庫的建物であろうと考えられる。遺構内からは、13世紀代の灰釉系陶器が出土している。

なお、ＳＸ04南端から、砂岩の角柱状の石を囲む状態でＩｂ期の土師質甕が出土したが、これは、A区の北西端に展開する住居跡に伴うものであると考えられる。

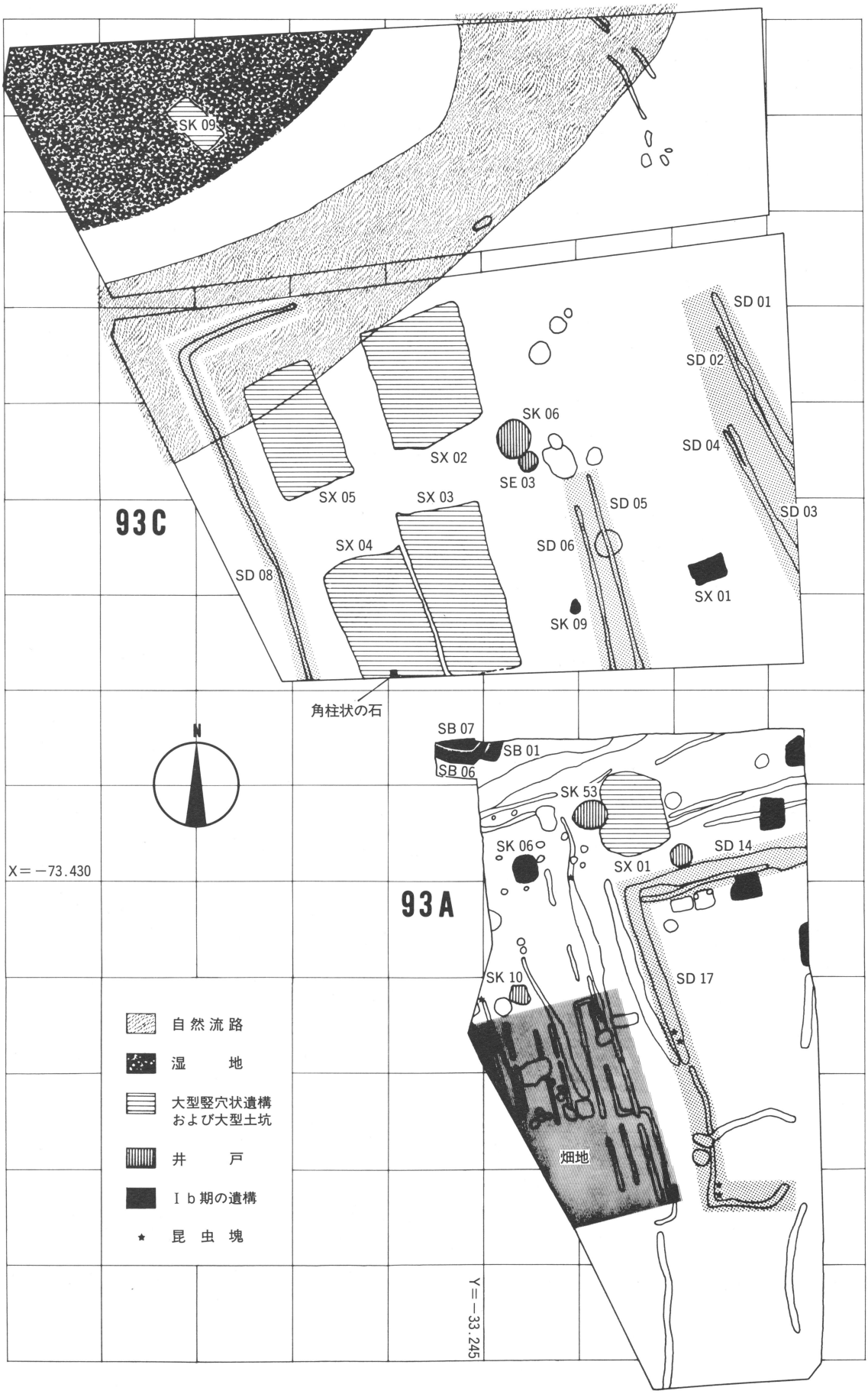
一方、自然流路の北側では旧地形が北西に向かってしだいに下がっており、黒色有機土層の厚く堆積した低湿地が広がっている。G区の東側に続くこの低湿地の上面では、唯一方形土坑ＳＫ09を検出したのみである。遺構内からは、灰釉系陶器が若干出土している。

以上のことから、C区では、微高地上に区画溝で囲まれた広い区域が存在し、その内側に大型倉庫群と井戸が展開していた状況が推定される。また、C区の北西部からG区に続く湿地部分では、居住域とは異なる様相が展開していたと思われる。　　（栗林典昭）

Ca区　完掘状況



Ca区　ＳＥ03たち割り状況



第３図　Ａ・Ｃ区Ⅱ期主要遺構配置図（Ｉ：600）

A・C区の遺物

（Ⅰ期） Ⅰ期の遺物は、C区の南端からA区中央部分にかけて、Ⅱ期の遺物分布範囲のほぼ中央に細長い帯状になって分布する。Ⅰａ期とⅠｂ期の時期差については、第２層上位と３層上位との間に洪水性の堆積が認められたため、層序で区別した。

Ⅰａ期の遺物（第４図－９～11）は、岩崎17号窯式にほぼおさまる。図示した遺物のほかに、A区ＳＢ08・09からは、宝珠形の紐をもち、内面にかえりを設けた杯蓋や土師質甕などが出土しており、この時期の一括資料の好例といえよう。

Ⅰｂ期の遺物（第４図－１～８）は、高蔵寺２号～黒笹90号窯式にほぼおさまる。図示した遺物のほかに、A区ＳＢ01・06出土遺物など一括性の高い資料がある。

また、隣接する遺跡と比較すると、田所遺跡93Ｇ・Ｈ区や大毛池田遺跡93Ａ・Ｂ区にはほぼⅠ期の遺構が展開する。近接のⅠａ期に併行する遺跡としては、浅井古墳群があげられる。第５図－９は、C区第２層中より出土した緑釉陶器である。なお、Ⅰａ期とⅠｂ期間の第２層からは、遺構に伴わないⅠ期の遺物が多く出土している。

（Ⅱ期） Ⅱ期の遺物は遺跡のほぼ全域に広がって分布する。時期的には鎌倉時代をほぼ網羅する。C区の大型竪穴状遺構・ＳＸ05出土資料（第５図－１～３）はⅡ期の初頭に位置する。出土状況は、上から３・２・１の順で重なっていた。この遺構の東に隣接するＳＸ02からも同時期に比定できる資料が出土しており、遺構の配置が、２棟一単位で構築されていることの裏付けとなろう。なお、Ｇ区からも同様に大型竪穴状遺構が２棟一単位の配置で確認されている。遺物についてはⅡ期のものが若干出土し、共通する点が多い。今後の調査により遺構の位置・遺物などから、大型竪穴状遺構の性格が明らかになろう。

A区の大型土坑・ＳＸ01の遺物（第５図－４～６）はⅡ期の中心とし、一括資料として好例となっている。第５図－７は「南無大□」と表記してあり、卒塔婆であろう。また、煤の付着した遺物や栴檀（せんだん）の種子が多量に出土している。

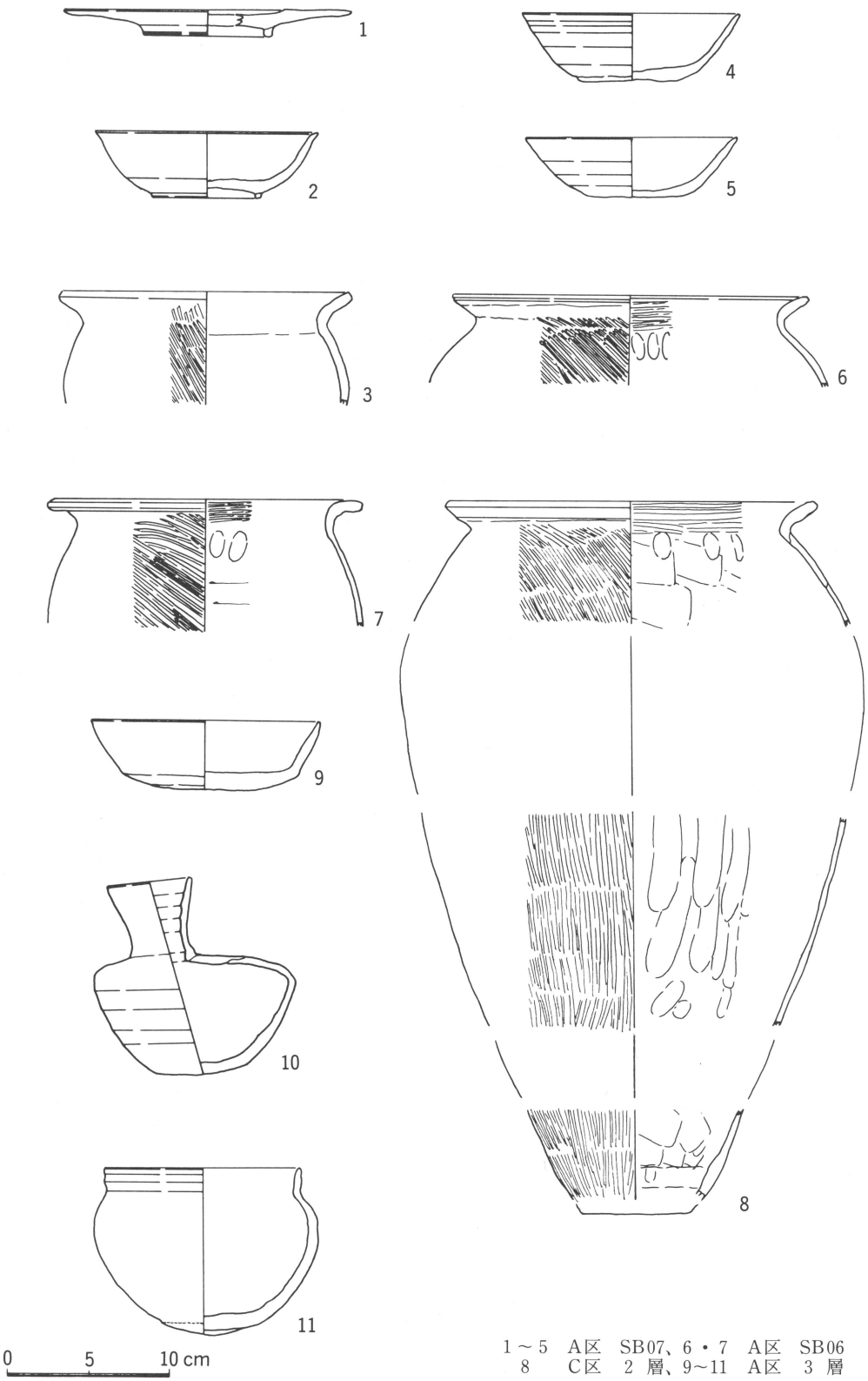
A区のＳＫ04出土資料（第５図－８）は、常滑の甕であり、肩部に２カ所、底部にも焼成後の穿孔がある。これらの痕跡や土坑の底に据えられていること、口縁部上に曲物が残存していることから、この甕は井戸の井筒として転用されたものと考えられる。

このほか特筆すべき遺物としては、青磁・白磁など磁器の椀類、「元武通宝」をはじめⅡ期に属すると思われる宋銭が多数出土している。

（Ⅲ期） Ⅲ期に属する遺物は、Ａ・C区ではほとんど出土していない。しかし、遺跡の西側に相当するＦ区では当該期の遺構に伴って古瀬戸（四耳壺）などが出土している。

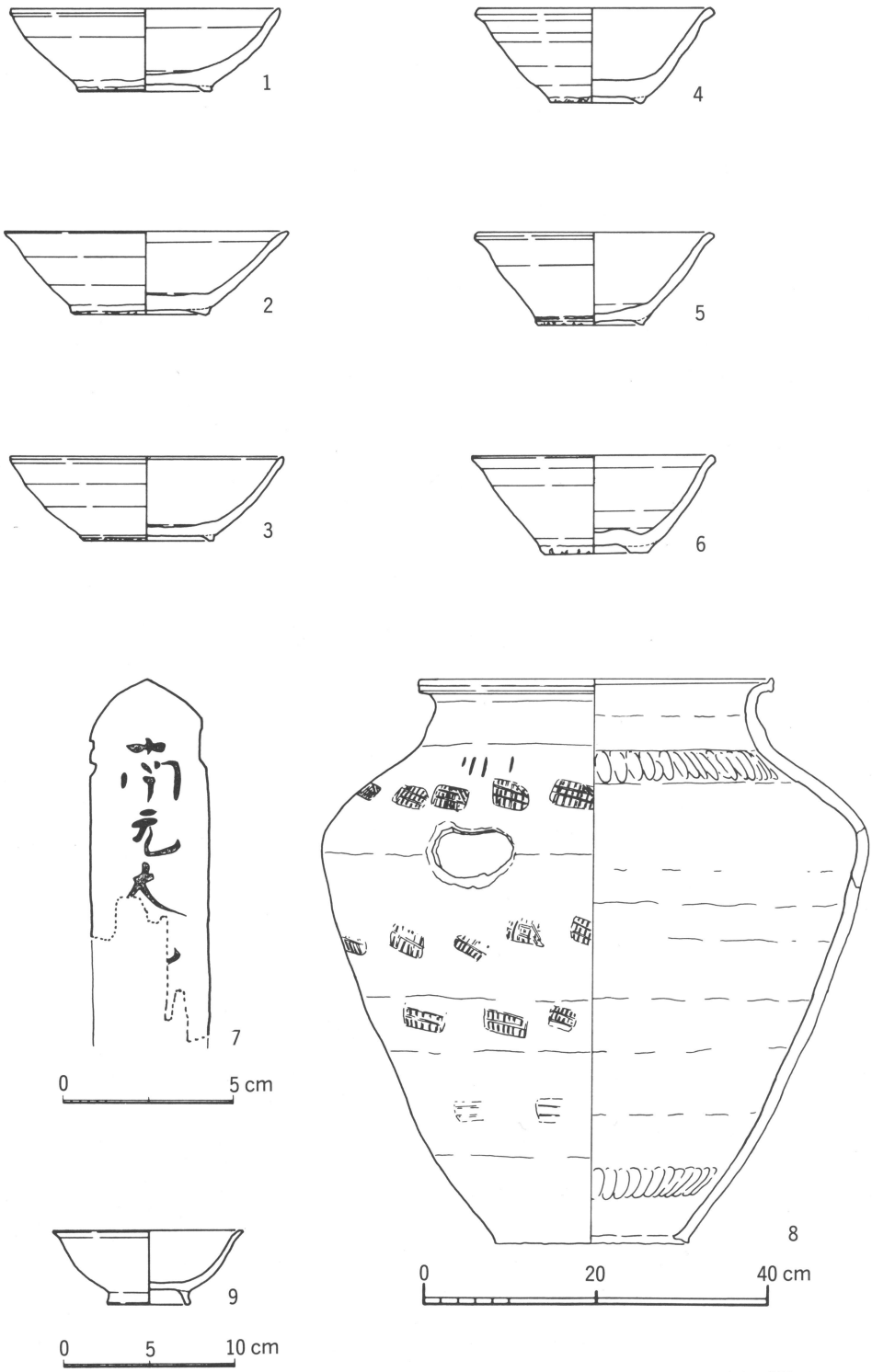
以上のことから、Ⅱ期からⅢ期にかけての遺構の動向が北東から南西に移行している可能性がある。

（永井宏幸）



1～5　A区　SB07、6・7　A区　SB06
8　C区　2 層、9～11　A区　3 層

第4図　Ⅰ期の遺物（1：4）



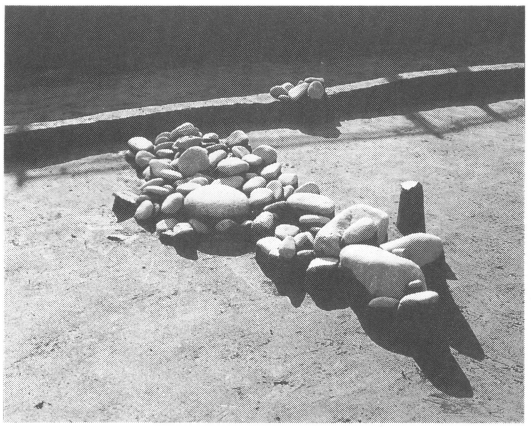
1～3　C区　SX05、4～7　A区　SX01
8　A区　SK04、　9　C区　2 層

第5図　Ⅰ～Ⅱ期の遺物（7　1：2、8　1：8、その他　1：4）

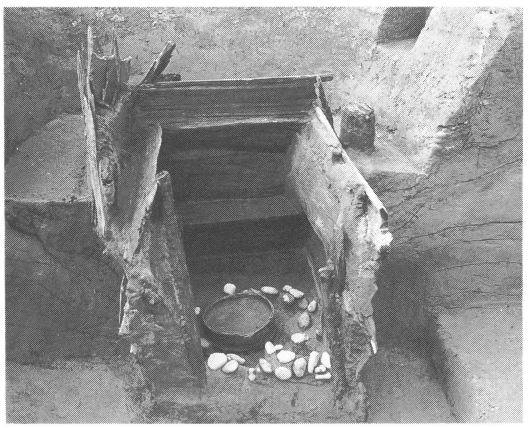
E～G区　E区では調査区の北端などで溝４条と土坑２基を検出したが、全体として遺構は希薄であった。また、旧地形が南方形へ緩やかに下がっていくことを確認した。これらのことから、E区は本遺跡の南限域であると考えられる。

F区では溝22条と土坑38基を検出した。このうちＩｂ期の遺構としては、調査区の北東部分で炭化物を伴った土坑を数基、南東部分で東西方向の溝１条を検出した。遺構内からは、11～12世紀頃の須恵器や灰釉陶器が出土している。なお、調査区南東部分の下面から９世紀頃の須恵器がまとまって出土しており、この時期の遺構はさらに広がる可能性をもっている。これらのことから、F区の東部分に、A区の北西部から続くＩｂ期の居住域が展開していることも想定できる。II期の遺構としては、調査区の東部分から東西方向の溝数条とこれに直交する南北方向の溝４条、方形土坑十数基を検出した。このうち南北方向の溝２条は、いずれも幅１ｍ前後で深さ0.3ｍであり、西側にＬ字状に屈曲しており、何らかの意味をもった区画溝であると推定できる。III期の遺構としては、拳大ないしは30cm程度の河原石からなる集石を４基確認した。集石の下からは骨片や四耳壺片が出土しており、集石墓であると考えられる。

G区では調査区全体にII期の遺構が展開する。調査区東部分で北東から南西方向の溝ＳＤ07を検出したが、これは最大幅2.05ｍ、深さ0.6ｍ、断面がＶ字形で堀状の溝である。このＳＤ07の東側では、方形土坑９基が密集した状態で確認された。ＳＫ18を例にとると、長軸315cm、短軸270cm、深さ75cmで、埋土は褐灰色シルトと灰白色シルトとの斑土であった。ＳＤ07の東側は、おそらく墓域であったと考えられる。この区域の下層では、東のＣ区北西部分から続く湿地状の堆積が認められる。井戸を５基確認し、このうち調査区南西部分の２基は良好な状態で確認された。ＳＥ04では井戸枠が非常に良好な状態で残存していた。ＳＥ05の埋土からは完形に近い灰釉系陶器が多数出土している。調査区南西部分ではまた、大型の竪穴状遺構ＳＸ01・02を２基ほぼ東西に並んだ状態で検出した。ＳＸ01は9.5×17ｍ以上の平面規模をもっている。ＳＸ01・02はＣ区の大型竪穴状遺構４棟と類似している。このことから、ＳＤ07の西側は居住域であったと考えられる。　（今西康二）



F区　集石墓



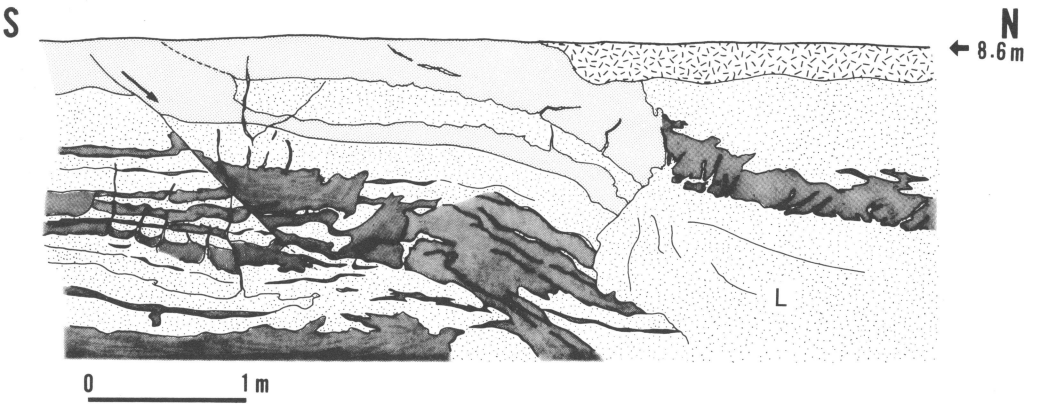
G区　ＳＥ04

地震痕　大毛沖遺跡では、少なくとも新旧２時期の古地震による地震痕が確認された。

新期の地震痕は、液状化した砂層が上位の地層を引き裂く『砂脈』で、現代の水田耕作土直下まで噴き上がり上端は削剝されていた。この砂脈には平面形態で、①直線状を呈するもの、②網目状を呈するもの、③円形あるいは楕円形を呈するものの３つがあった。これらの地震痕は、1891年に発生した濃尾地震による地震痕と考えられる。①～③の形態は、濃尾地震発生の際の「岐阜－一宮線」（断層）の活動を反映しているものと考えられる。

旧期の地震痕は、断層運動により形成されたとう曲構造（第６図）である。この構造は、93Ｃ区の旧河川の横断トレンチ３カ所で確認されたもので、少なくとも20m以上連続して観察された。また、とう曲部の上部にはシルト質砂層の水平堆積がみられる。さらにそのシルト質砂層は、12世紀代と考えられる大型の竪穴状遺構に掘り込まれている。したがって、このとう曲構造は、少なくとも12世紀以前の地震により形成されたものと考えられる。

とう曲構造から断層はＮ58°Ｅ方向に延びると推定される。とう曲により変形した地層は上部で45°下部で65°以上の北落ちの傾斜を示し、垂直方向の変位量は１ｍをこえる。この断層は、「岐阜－一宮線」と斜交するように発達すると推定されるが、「岐阜－一宮線」の活動にともなって形成されたものであろう。したがって、とう曲の形成は、1891年に発生した濃尾地震の１サイクル前の活動（仮称「古濃尾地震」）を反映したものであり、単に遺跡における地震痕の発見だけでなく防災面でも大きな意義をもつ。詳細な地震痕の記載や地震発生時期の検討については、本年報の研究編の論考として示した。　（服部俊之）



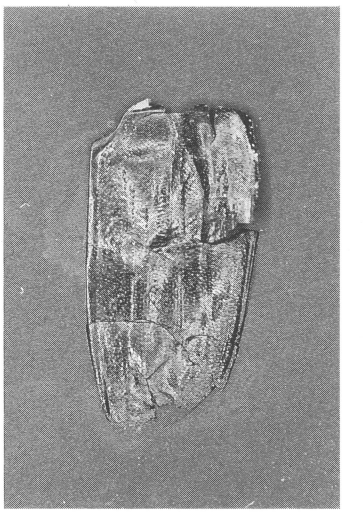
(A)　←の部分で正断層が発生している。Ｌの部分は噴砂による砂層。

第６図　地震による地層の変形

昆虫遺存体　鎌倉時代の居住域を区画する溝の西側に集中して、南北に延びる畝状遺構が十数条確認された。畝条遺構は畑作地と推定されるが、この遺構に伴い、数百個体の昆虫片の塊で満たされた土坑が７カ所発見された。この土坑は、直径10～20cmの楕円形、皿状を呈し、底には約３cmの厚さで昆虫の体節片のみが集積している。内部は明灰色のシルトにより覆われていた。これらの昆虫は森　勇一氏（明和高校教諭）によりヒメコガネを主体とし、一部マメコガネを含むものであることが判明した。昆虫遺体が集積するには、一般に次の３つの場合が考えられる。

①昆虫食の大型鳥類の糞（ペレット）②草食獣の糞に集まる食屍性昆虫のすみか③縦穴の底の屍体に集まった食屍性昆虫の遺骸。

しかし、今回の昆虫片は昆虫の種類や土坑の大きさなどから、上記のいずれにも該当しない。ヒメコガネ・マメコガネは、ダイズ・クワ・ブドウやカキなどの畑作物や果樹を食い荒らす害虫である。発見された場所が畑作地と考えられる畝状遺構であることから、鎌倉時代、当時の人々が畑の作物を食い荒らす害虫を捕まえて殺し、溝の周囲に埋めたのではないかと考えられる。もし、この推論が妥当であるならば、鎌倉時代における害虫駆除の一つの方法をかいまみることになろう。　（鬼頭　剛）



大毛沖遺跡のヒメコガネ

まとめ　今回の調査によって下記の成果が得られた。

１．Ａ区では、奈良時代の住居跡（Ｉａ期）を検出できた。なかでもＳＢ09は造付け竈を持つ竪穴住居であった。また、奈良～平安時代の住居跡（Ｉｂ期）を含めると計９棟の竪穴住居が確認され、古代の居住域であったことがわかる。II期には、中世の居住域を区画する溝、さらにその西側には生産域が展開することがわかった。生産域では、ほぼ南北方向に延びる畝条遺構より昆虫塊が７カ所確認された。これは生産域であることの傍証資料であり、また、人為的な廃棄とするならば、当時の害虫駆除を復原できる特記事項となろう。

２．ＡからＣ区にかけて展開する自然流路からは、尾張平野では初見である大規模地震による変形した地層が確認できた。また、ＣからＧ区にかけて自然流路に沿って広がる湿地帯には墓域が展開している。

３．Ｅ区については、大毛沖遺跡の南限域であることがわかった。Ｆ区では、III期の集石遺構から四耳壺・骨片などが出土することから、墓域が展開していたと思われる。

（永井宏幸）